

特集  
都市の地域力  
～都市を支えるソーシャルキャピタルの醸成～

Special Features  
Regional power of urban areas  
Creating social capital to support urban areas

福祉  
Welfare

## 子育てと仕事の両立可能な社会を目指して

～NPO法人フローレンスの取り組み～



高 亜希

KOU Aki

NPO法人フローレンス

### 1—「病児保育」という言葉を知っていますか

病児保育とは子どもが急に熱を出したり病気になったときに、保育園や働く親御さんの代わりに子どもを預かることです。保育園では子どもに37.5度以上の熱があると預かってもらえません。そのために、共働きの親御さんは、会議やどうしても外せない仕事があったとしても、休まざるを得ない状況になっています。そして、病児保育施設の数、全国の保育所数約30,000件に対し、わずか2%と圧倒的に少ないのが現状です。

仕事と子育ての両立をしている親御さんが、「育児支援策で期待すること」のダントツの1位は「こどもの看護休暇」であり、実に86%の方が必要だと回答しています。また「保育園に期待すること」も、「こどもが病気のときも預かって欲しい」が1位となっており、非常に高いニーズがうかがえます。

### 2—病児保育の現状

では、なぜこのように高いニーズがあるにもかかわらず病児保育施設は増えないのでしょうか。その理由として挙げられるのが、施設の経済的自立が困難だからで

す。施設を構えるための初期投資はもちろん、維持するための費用負担も大きい。また「いつ、どれくらいの数の子どもが風邪をひくか？」など、子どもの風邪は季節変動が大きい上に、予測が出来るものではありません。したがって、民間の保育園や小児科医院が安定的な経営をしていくためには、困難が大きい事業であることは確かです。

そこで病児保育施設のほとんどは、行政からの補助金を得て事業を行っています。残念ながら約9割の施設が赤字経営なのです。行政からは年間660万円の補助金が支給されますが、この金額はかろうじて保育スタッフの給料をまかなえるだけの金額です。さらに補助金を受けた施設は、子どもを預ける親から1日2,000円以上受け取ってはならないという規制がついてまわるのです。ベビーシッターを頼むと1時間で1,500～2,000円なので、施設は市場価格の10分の1で、利用者にとっては非常に嬉しい値段設定ですが、事業者にとってはたいした収入になりません。そのために高いニーズがあってもなかなか取り組みが進みません。補助金をもらえらうほど赤字になる病児保育。子育て世代にとってライフ

■表1—病児保育のニーズ



■写真1—子育てベテランママの家

ラインともいえるほど不可欠な支援であるにもかかわらず、社会的取り組みは遅れています。

### 3—NPO法人フローレンス誕生

フローレンスを立ち上げるきっかけは、後に代表となる駒崎弘樹に掛かってきた、母からの1本の電話でした。「雇い主であるワーキングマザーが、子どもたちの発熱を理由に会社を1週間欠勤したせいで解雇されてしまった」というのです。

子どもが熱を出したときに保育園で預かってもらえないのなら、私たちが小さい頃はどのようにしていたのでしょうか。昔も働くお母さんはいました。母親が外出しなくてはいけないときに子どもが急に体調を崩した場合には、おじいちゃんやおばあちゃん、近所の人たちなど、いわゆる地域の人々が子育てで協力し合うことがごく普通のことでした。しかし、現在では核家族化が進み、今はもう昔のような地域の助け合いがなくなっていることに気づくのです。

子どもが熱を出すことは当たり前のことなのに、看病のたびに休暇を取れば解雇され、休みがちのために正社員になれない、そんなあたり前のことをして職を失う社会に矛盾を感じ、こうした課題を解決しようと病児保育問題に取り組むことになりました。

### 4—地域密着型病児保育

そこで、考えたのが地域密着型病児保育です。地域の小児科医や子育てベテランママや保育実務経験者の協力を得て、働く親御さんを、そしてお子さんをサポートする。昔あった、いわゆる地域の人々が子育てで協力



■写真2—病児保育の現場

し合う仕組みを、うまく取り入れた次世代的なシステムを作りました。また補助金に頼るのではなく、病児保育が経済的に成り立つモデルを構築し、病児保育問題を解決したいと考えました。

特定の施設を持たず、地域の「子育てベテランママの家」でお預かりする「脱施設型」を採用することにより、固定費を大幅に削減し、地域の小児科医と提携することによって、医療的なバックアップ体制も万全にしました。そして、通常のベビーシッター業務が従量制課金なのに対し、フローレンスは月会費制を採っています。皆さんで積み立てた月会費から、病児保育の必要経費をまかな



■写真3—提携小児科医の診察



■写真4—フローレンスのビジョンの説明



■写真5—子どもレスキュー隊員の紹介

う、いわば「共済型」の仕組みによって格段に経済的な価格でのサービス提供が可能となったのです。また、季節変動という弱点をカバーし、低価格ながら安定的な事業経営の実現も可能となりました。フローレンスは施設を作ることだけが病児保育問題の解決方法ではないことを証明したのです。

こうしてフローレンスは、2005年から全国初の地域密着型病児保育サービスをスタートし、現在では都内17区、約400世帯の働く親御さん・お子さんをサポートしています。

### 5—従来型の病児保育との違い

フローレンスでは「いざ病児保育！」となった時、レスキュー隊員さんと会員さんの不安を解消し、やりとりがスムーズにいくようにご利用前に親御さんとお子さんの交流の場を設けています。

入会説明会のオリエンテーションでは、レスキュー隊員を交えてお子さんの普段の様子、好きな遊び、保育の際に注意してほしいことなどを詳細にヒアリングする「個別面談」のほか、突然の病児保育発生を想定してご利用イメージをご理解いただく「ロールプレイ」などのプログラムを用意しています。

また、フローレンスではかかりつけ医から「お預かりOK！」の太鼓判を頂いてからのお預かりになっています。当日の朝、必ずかかりつけ医の診察を受けることで、一日の保育で気をつけるべきこと

や想定される症状の変化などについて、あらかじめ専門家のアドバイスを得ることができます。重篤な症状の場合には、提携医である「小坂子ども元気!!クリニック(中央区勝どき)」の病児保育室への搬送も可能です。

そして、保育中の様態の変化などには安心して提携小児科医に電話相談でき、迅速に専門的なアドバイスを受



■図1—フローレンスにおける病児保育の仕組み

けることができます。提携小児科医のバックアップはとても心強く、フローレンスでは1,500回以上を越える病児保育において、お預かりにストップがかかった例は病状が重く、入院の必要性があった時の一度だけです。

### 6—名前に込めた想い

“フローレンス”の名前の由来は、あのイギリスのフローレンス・ナイチンゲール(1820～1910)のファーストネームから名付けました。私たちが病児保育という看護と保育の融合した領域に挑戦することから、看護の代名詞であるナイチンゲールの名を借りました。

しかし、彼女を尊敬したのはそれだけではありません。ナイチンゲールは当時の非科学的な軍隊の衛生管理によって、戦地で数多くの若き兵士が病気で死んで行ったことを、数学統計を駆使して初めて証明してみせました。また、それまで病院内の召使という職に過ぎなかった看護婦という職業を、専門教育を受けたプロフェッショナルという存在に変える学校を創り出しました。つまり、ナイチンゲールはイノベーター(革新を起こす人間)だったのです。

私たちも、日本の子どもたちに関わる古い硬直した制度や価値観、仕組みなどを換え、新たな価値を創造するイノベーターにならんとする志の証として、“想い”を名前に刻み付けました。

### 7—全国の病児保育事業者への育成支援

フローレンスをご利用頂いている親御さんからこんな声が届いています。

「パートタイムから正社員になることができました！前はいつ子どもが病気になるかわからず正社員なんて無理だと思っていたけれど、今はフローレンスがいってくれるから安心していきます」「一人目の子を産み、職場復帰となったときは、本当に仕事と両立できるのか不安と焦りでいっぱいでした。それでも子どもレスキュー隊員さんがいたから、今では子育てと仕事をなんとかやりきれるという自信を持って、二人目が宿ったときはそのことを心から喜ぶことができました」。

まだまだ子育ては、長く母親が中心となってやってきたので女性の専門分野という考えが浸透しています。しかし、病児保育問題を世の中に訴えることで、子育てと社会が結び付き、いろいろな人が関心を持ち始めています。例えば、現在までフローレンスには様々な企業や団体から「現在一時預かりの保育をやっているが、病児保育のニーズがとても高く、何とか力になりたいのだが…」「病児保育事業を興し、地域の働く親御さんのため



■写真6—フローレンスのスタッフ

に貢献したい」など、他の地域でも病児保育事業を行いたいといったお問合せや相談をたくさん頂いています。

そこで、フローレンスでは病児保育を全国に広めるため、今年から全国の保育関係者にフローレンスのノウハウを提供することで、社会的に当たり前のインフラにしたいと考えています。こうした全国にいる病児保育の立ち上げを希望している団体を育成支援し、彼らがそれぞれの地域で病児保育を行えば、日本全体においても病児保育問題が解決できます。つまり全国の共働き家庭を悩ませる病児保育不足を解決するためにも、全国の病児保育事業者への育成支援が必要だと考えています。

### 8—子育てと仕事の両立可能な社会づくりへ

日本では子供の数が減り続け、少子化のスピードはますます加速しています。もちろん労働人口も減少し続け、日本の経済は悪化していくでしょう。そこで、必要となってくるのが、女性が働ける環境です。その中で病児保育はなくてはならない存在です。

幸いなことに日本は、「気づいた個人」が事業を立ち上げ、社会問題を解決できる時代になり始めています。私たちの生きるこの社会を変えるのは、政治家や官僚ではありません。「『社会を変える』を仕事に出来る」。そんな時代を私たちは迎えているのです。そして今後も、子どもの世代のためにも病児保育問題に立ち向かい、子育てと仕事の両立が可能な社会を築いていきたいと思っています。

日本が持続可能な成長をし続けるためには、子育てと仕事の両立可能な社会づくりをすることが必須です。そしてフローレンスが両立可能な社会へのきっかけになり、地域や社会と結びつく役目を担っていきたくと思っています。